

## 令和4年度 第1回白馬高等学校学校運営協議会 議事録（概要）

1 日 時 令和4年（2022年）6月6日（月）9時30分～12時00分

2 場 所 本校体育館

3 参加者 委員9名（欠席 中村義明委員）  
この他、長野県教育委員会より3名  
（高校再編推進室 室長 宮澤直哉氏）  
（ 同 主幹指導主事 山岸 明氏）  
（ 同 主任指導主事 有坂清明氏）  
白馬・小谷両村関係者3名  
（白馬村議会議員 太田伸子氏）  
（白馬中学校長 浅原昭久氏）  
（小谷村総務学校係長 斎藤利浩氏）  
白馬山麓事務組合白馬高校支援係3名  
白馬高校魅力化コーディネーター  
白馬高等学校職員3名



### 4 次 第

（1） 開会の言葉（井出敦白馬高校教頭）

（2） 宮澤県議会議員講話

- 「魅力ある白馬高校をつくる会」の会長として白馬高校の再生にかかわった立場から、これまでの経緯をお話します。
- 10年前、当時の校長からの訴えが発端となり、魅力ある白馬高校をつくる会を設置し、各方面への視察や県教育委員会と相談を重ねながら白馬高校の再生を図った。
- 白馬高校の学校運営協議会は長野県初、全国9番目に設置された。その位置づけは私立高校でいう理事会に相当し、学校経営に対して意見し指導できる決定機関であると認識している。しかしながら、これまでの議事録を全て読んでも、学校評議員会の域を出ていない。
- 国際観光科の設立にあたり、①学校は MARCH レベルの大学進学に対応できる学力の定着を図り、学力不足の生徒はしろうま塾で補う。②村行政（白馬山麓事務組合）は、英語の専門塾の設置、部活動に対する支援、寮・下宿の手配と運営を行う。③県教育委員会は学校運営協議会の設置と、寮舎監に教員OBを採用し、学校アドバイザー、英語科主任教員を配置することが、県教育委員会と地元両村とで合意された点を確認してもらいたい。
- 両村は、巨額の資金支出について、今のやり方が適切であるか見直すとともに、寮運営の方策についてもあらためて協議してもらいたい。学校は学力低下を防ぎ偏差値を上げることを、県教育委員会は学校運営協議会の責任と役割を明確にし、実行案を決定できる経営会議としての位置づけをお願いしたい。
- 中山間地存立特定校は、積極的に選ぶべき選択肢ではない。今こそ10年前の白馬高校再生に向けた取り組みの原点に立ち帰り、残された2年間で議論をより深め実行に移してもらいたい。

（3） 長野県教育委員会挨拶

＜宮澤室長＞

- 御多忙の中お集まりいただき、また委員の委嘱をお受けいただき、ありがとうございます。
- 今年4月より再編推進室長となったが、平成29年から令和元年までの3年間、当室の前身となる高校改革推進係の指導主事としてこの運営協議会に出席させていただいた。
- 高校再編についてはこれまで一次から三次案まで提示され進められて来ている。白馬高校は三次案で対象校とはなっていないが、今年度中に三次案が確定すると、令和5年度から5月1日現在の生徒数をもって再編基準の適用が始まる。
- 委員の数は規則で決まっているが、昨年度、白馬中学校長の参加を求める声があることは承知している。本協議会での結論として改正が必要と要望されるのであれば、真摯に受け止め対処していきたい。

(4) 学校長挨拶

＜関校長＞

- 昨年当初、在籍数が 163 人となり、危機的な状況という認識からこの協議会が始まった。コロナ禍ではあったが、感染状況を確認しつつ可能な限り本校の特色ある教育活動を行ってきた。高体連大会等で活躍をしている生徒も多く、学校生活自体は安定している。
- 今年度さらに生徒数は減少して 140 人となったが、頑張っている生徒たちを応援し、今後も本校の教育活動が継続して行えるよう学校の存続を願っている。

(5) 委員の自己紹介

会長選出

互選により、会長に白戸委員、副会長に武田委員を選出、承認される。

(6) 審議事項

① 令和 4 年度白馬高等学校の学校経営計画について

＜関校長＞

○学校の現状報告

生徒数の推移、入学者の出身地別の推移、部活動加入状況、寮生・下宿生の人数、全国募集に向けた取り組みと学校説明会・相談会等の日程について報告。

○今年度の取り組み

国際観光科の特色のある取り組みを普通科にも広げている。授業や課外活動において、小・中学校と連携しながら幅広く取り組んでいく。国際交流や英語力の向上を大きな課題として進めていきたい。進路希望調査では、現 3 年生は 6 割が 4 年制大学を希望している。生徒の希望を大切にし、幅広い進路に対応した指導を行い、進路実現に向けて支援を続けていきたい。

○新入生に対する入学後のアンケート結果

中学までの活動を継続したい、スキーを続けたい、SDGs を学びたいといった肯定的な意見が寄せられた。入学して良かったかという問いに対しては、約 8 割が満足・まあ満足と回答している。自分の進路の実現に向けて、生徒が自由に活動できる学校でありたい。

○学校経営方針

「三つの方針」を今年度改訂した。「現代社会で生きていくために必要な知識を身につけ、それらを活用できる生徒」、「他者を尊重し、対話を通して協力して活動できる社会性を身につけた生徒」、「自分自身の未来や地域の未来を創造できる生徒」の育成を目標とし、その実現に向けて日々の教育活動を展開したい。

○重点目標達成のための具体的取り組み

今年度の重点目標は、「令和 5 年度高校再編基準該当の回避」と「個に応じた生徒支援と特色ある教育活動の推進」の 2 つとした。

重点目標 1 については、2 年間かけて 160 人を回復する具体的数値目標を掲げた。生徒確保に向けて、白馬中学校、小谷中学校をはじめとする旧第 12 通学区にある中学校の中学生と保護者対象の学校説明会や地域への広報活動を強化する。

スキー部の活動は、本校の特色として欠かすことのできないものであり、中学校で活動している生徒が白馬高校で引き続き活動していけるように、白馬スキークラブとも連携し生徒を確保していく。

普通科と国際観光科の 2 学級体制を維持していくためには、全国募集が必要不可欠となる。地元生と県外生の確保に向けて、学校の魅力化を一層図っていく。

重点目標 2 については、「学習・生活の両面における個に応じた丁寧な支援・指導を通じた、いじめや体罰のない安心・安全な学校づくり」、「地域からの提案を活用した、環境と観光、国際を軸とする探究的で多様な学びの機会の提供と生徒個々のキャリアデザインの具体化支援」、「支援係との緊密な連携体制の継続、寮生・下宿生に対する丁寧な支援・指導と地域との交流促進」、「地域みらい留学を通じた全国募集の推進と地元生確保に向けた、小中学校に対する積極的な情報発信、相互交流の強化」の 4 つを昨年度に引き続き掲げた。校内に地域連携事業推進係を設け、地域の資源を有益に活用していくために、新たに学びコーディネーターを配置した。

<白戸会長>

○学校からの説明、提案に対して質問、意見はあるか。

<笹川委員>

○国際観光科では英語重視の教育をしているようだが、観光に直結する国内の旅行業務取扱管理者等の資格取得に向けた観光に直結するような取り組みも検討してはどうか。

<関校長>

○国際観光科では、地元の基幹産業である観光を柱として、生徒の将来につながる力を育成している。英語検定や商業関係の検定のほか、直接旅行業に関わる諸資格が得られる素地を本校での学習の中で身につけさせたい。ご意見を参考にさせていただく。

<白戸会長>

○校長から提案された学校経営方針の承認を求める。  
異議がないため、この方針を承認。

## ② 白馬山麓事務組合支援事業の内容および予算について

<山麓事務組合松澤事務局長>

○支援体制図は資料 29 ページに掲載。しろうま Pal House の運営を通して、集団生活を通じて基本的な生活・学習習慣を身につけ、互いを尊重し、規則正しい生活をすることで人間的な成長を促すことを目指している。現在、男子寮は 3 年生と 1 年生が二人部屋で生活している。

○白馬山麓事務組合として、全国募集・公営塾・寮運営・魅力化の業務を担い、寮全体の生活指導や監督は主として舎監が、点呼などはスタッフがやっている。寮生・下宿生連絡会を高校と毎月定期的に行い、先生たちも寮・下宿を訪問して生徒の様子を共有している。

○現在交付されている地方創生交付金が受けられる令和 6 年度までに、その後の支援体制を確立する。コロナが落ち着けば、地域の清掃活動や祭りのほか、BBQ などのイベントも実施したい。資料の最後に支援事業全体の当初予算の図を寮・全国募集・公営塾ごとに掲載した。

## 質疑・応答

<白戸会長>

○事務組合からの説明について質問、意見はあるか。

<下川委員>

○県教育委員会にお聞きしたい。中山間地特定校とは具体的にどのようなものか。生徒数を確保するための県外募集については苦しい状況が続いている。再編基準では地元中学から卒業者の半数が入学すれば 160 人以下であっても基準に抵触しないという認識だが、それでよいのか。

<宮澤室長>

○中山間地特定校は再編基準の中で示しているもので、1 学級募集であっても地元の支援を受けながら単独で存続させることを想定した学校の名称である。後段についてはその通りである。必要であれば次回資料を用意する。

<下川委員>

○生徒数確保のためにどのような生徒でも受け入れるという考え方ではなく、ぜひよい方法を考えてもらいたい。

<白戸会長>

○この後のディスカッションの場で議論したい。

○白馬山麓事務組合の支援事業の承認を求める。

異議がないため、この方針を承認。

## (7) 意見交換

### 議長より基調提案

<白戸会長>

○ここからは、2 つのグループに分かれて、運営協議会としての取り組みについて皆さんのお考えをお聞きする中で議論を深めていきたい。

○白馬高校は生徒支援のために様々な工夫を行い一生懸命努力されている。大学進学を含め、良い方向に成長していることは間違いないし、地域からの見方も変わってきている。それに加えて、両村からの支援も極めて大きい。

○一方で、外部環境の変化は大きく、大学の話をする、少子化により 8 年後の 2030 年には志願

者数が定員を10万人下回る試算が出ていて大変厳しい状況である。地域で学びを維持していくことは、どこの地域にとっても極めて重要な問題。島根県は以前から中山間地研究センターを作って徹底的に対策を練っている。人口の1%を毎年取り戻すという取り組みの中の1つに隠岐島前高校の話もある。高校を維持するためだけではなく、地域を維持するためにはどのようにしたらよいかという視点で取り組んできたのである。そこで、この場では地域として白馬高校にどのような役割を期待しているのかを議論していただきたい。

○長野県内でも、白馬・小谷に関する情報量が多い。先日、白馬中学校がSDGsの学習会を開いたが、SDGsの17テーマのすべてに講師を見つけられる地域は他にはない。この地域全体の大きな枠組みの中で、校長が発言したとおり、高校を今後2年間でどのようにしていくかを考えられればよいと思う。

○このあと、Aグループは白戸、Bグループは武田副会長に進行をお願いしたい。委員以外の方もグループに入って発言していただきたい。

#### ① グループ討議（A、Bの2グループ）

Aグループ（相沢・富原・白戸・斎藤・関・太田・浅原・柳田）

Bグループ（武田・草本・笹川・出口・下川・松澤・有坂）

#### グループAより

##### <白戸会長>

○今年、本運営協議会で何をしていきたいか、どなたからでもご発言いただきたい。

##### <富原委員>

○公立高校として残るべきなのか、私立になっても地元で高校があることが大事なのかということを考えている。オンラインで受講でき卒業できる学校も世の中にはある。

##### <相沢委員>

○同級生からは、地元出身でない生徒にそこまで税金をかける意味があるのかと言われる。卒業生としては、高校が存続していくことを望んでいるが、どうしていけばよいかすぐにはわからない。

##### <太田白馬村議会議長>

○今日は議会の立場で伺った。白馬村・小谷村にとって、地域に子どもがいなくなってしまうのは大変だと、最初に再編基準に該当した時から、子どもたちにとってどうなれば住みやすくなるのかということを考えていた。東京の方で聞いても白馬高校は有名で、楽しいイメージがあり、多くの方が県外からも応援してくれているので、もう少し頑張りたい。国際観光科を開設して高校を残したのに、ここ数年で白馬高校が無くなったら、投入した税金は何だったのか申し訳ないという思いもある。

##### <斎藤代理>

○小谷村長の代理であるが、個人的な意見を申し上げる。コロナ禍の前は自分自身が高校支援担当として東京に行って生徒募集活動をしていたが、これからは地元の子どもの多くが入学するような取り組みが大切だと思う。志望校を決めるのは学校や行政ではなくて、本人と親なので、どのようにしたら白馬高校に目を向けてもらえるかを考えたい。

##### <浅原白馬中学校長>

○白馬中学を卒業した生徒たちがのびのびと、劣等感をもたず学べているのは白馬高校の存在によるところが大きい。ただし、地元中学からの入学を増やすと言っても、進路選択の自由は保障されなければならない。白馬高校の魅力が前面に出て、地元や全国から生徒たちが行きたいと思う学校になることが必要だ。存続ありきという考えではなく、白馬高校の役割や存在の意義をまずはっきりさせるべきだ。

##### <関委員>

○私も同じ思いでいる。これからの地域を支えていくために、地域として若い人をどう育てたいのかという考えが基盤にないと、高校のあり方は考えられない。地域に高校があるからそこへ行きなさいという話ではない。どのようなカリキュラムとどのような先生が必要で、どのように活動していくのか。これまで両村からは多額の貴重な税金を使って支援していただいているが、教育の中身をどうするのかという視点で予算の使い方を考える必要もある。仮に、先生の数が減ったとしても、教育活動が継続できるような方策がないかみなさんと一緒に考えていきたい。

<白戸会長>

○個人的な意見を述べさせていただく。南信の飯田の例では、同じく危機感から始まった。高校の魅力化というよりは、地域の魅力を学び、そこからそれぞれが進路選択をして一旦外に出るが、その後再び飯田に目を向けてもらうということを考えた。最初は7割が流出し3割が残るという状況だったが、今は逆になった。生徒は、3年間 250 時間のプログラムで地域と密接にかかわり、一緒に活動してきた。現在白馬高校にいる浅井教諭が中核となり、地域全体でビジョンを共有して取り組んだ。今の白馬・小谷はどうか。観光業に従事している人と農業に従事している人とが共通のビジョンを持っているだろうか。国際観光科設立当初、英語を勉強することが嫌だから入学しないという例があった。この地域で英語を勉強することが何に繋がるのかを明確にしない状態で「英語」という言葉だけが先行した結果だ。同様に、協議会だけではなく、協議会以外の人たちを含めて、この地域を将来どのようにしたいのかを明確にイメージしていないと、高校をどのようにしていくか考えることも難しくなる。

<柳田コーディネーター>

○何に魅力を感じるかは、人によって異なる。全国募集する高校はたくさんあるが、その中でなぜか白馬高校だけが身元引受人がいらないシステムになっている。しだいに誰でも入れるということが分かってきて、ある意味そこに魅力を感じる親たちがいて、初年度に比べて、入学生徒の抱える課題が大きくなった気がする。全国募集の制度自体に工夫が必要ではないか。この地域には生徒が興味を持てば、何かに限らず何でも助けてくれる人がある。夢の数だけ道がある。今 SDGs はブームだが、白馬ならではの具体的取り組みとして、自然環境を守る教育を熱心にやっている学校を売りにしたい。

<白戸会長>

○終了の時間が近づいた。話し足りないことも多くあるので、次の機会に改めて議論したいと思う。何かあればご意見いただきたい。

<関校長>

○協議会は、一定の方向性を出す場だということは今日ご理解いただいたと思う。「こうなったらいい」で終わってしまうと、誰がやるか曖昧になる。「学校はこうします」「村はこうします」ということを決めて前へ進んでいく場として皆さんのお力をお借りしたい。

<白戸会長>

○アクションを起こす場ということだ。

<太田白馬村議会議長>

○村議会からは、普通科は県が、国際観光科は全国募集の関係で村が見るというように、分担されていて、考え方が統一されていないように見える。ひとつの学校として全体と一緒に見るようにしていかなければならない。

<白戸会長>

○学校の実態としては、むしろ以前から普通科に国際観光科のカリキュラムを入れてほぼ同じ教育内容になってきている。学校の内外で情報共有とコミュニケーションが必要だ。

<太田白馬村議会議長>

○地元以外の子にお金を出すことを渋るというのではなく、出した結果がともなわないように感じている。

<白戸会長>

○地元以外の子と一緒に学ぶことに意義があると言われていたが、その検証が曖昧になっている。

<太田村議>

○公営塾の存在があまり地元の親たちに知られていない。

<白戸会長>

○東京大学や早稲田大学も半分は推薦入試になってきている。大学入試は一気に変わってきている。白馬高校でどのような学力をつけるのか考え直さなければならない。

○以上で、全体会に戻りたい。

グループBより

<武田委員>

○白馬高校を村の中でどのように位置づけていくかという点を踏まえてご意見をお願いしたい。

<出口委員>

○授業参観をして生徒の様子を見てみたい。生徒は多様であり、白馬高校はSDGsをはじめとした

特徴的な学びをやるべきだと思う。県外から白馬高校を選んだ動機を知りたい。石川や富山が雪不足で県大会を長野県で開催するという話を聞いている。白馬高校に来てスキーを続けようという生徒が多くいると思ったが意外と少なかった。

<草本委員>

○白馬高校の存続は地域の共通認識だが、村の負担が大きい。地元中学から卒業者の半数が入学すればよいという条件もあるので、まずそこを目指したい。現在 SDGs に力を入れている企業が多くそのベースも白馬にはある。中山間存立特定校の話もあったが、その利点や問題点を考えたい。白馬高校はもともと組合立だったが、そこに戻すと地域の負担が増える。国際観光科を設立し、再スタートして気運が高まり一時は生徒数が増えたが、再び減ってきたのは何か原因がある。現行の公立か中山間地か組合立か、どのような違いがあるのか、持続可能な高校をゼロベースで検討する必要がある。小谷中学・白馬中学の校長先生もおられるので、地元の中学生が求めている高校像を保護者の考えも含め知っていく必要がある。

<笹川委員>

○息子に白馬高校の話をする、「白馬高校は、偏差値が低い。とはいえ、いい学校。家からも近い。」と言う。白馬高校がどう思われているかを丁寧に調べていく作業が必要だと思う。

<下川委員>

○両村からの支援を前提に学校の存続をお願いして県外募集を始めたが、県外からの入学生は当初7人くらいという認識だった。その後、非常に人気が出て生徒数は200人を超えた。ところが再び減少していった。人数を確保するために県外から集めればよいということが問題で、多方面に影響している。協議会が学校運営方針を承認するという点を確認しなければいけない。今日のような議論を以前からやるべきだった。宮澤県議の話の意図は原点に戻れということ。両村の支援は限界に来ている。福祉や教育にお金を使うべきという厳しい意見の中で、地元で高校がなければ困るという考えのもと、議会の理解を得てやってきた。今後の支援のあり方について効果的な方法を考えていくことも必要だ。

<有坂主任指導主事>

○一個人の意見として申し上げる。県内どこの地域でも、「地域の子どもを地域で育てる」とおっしゃる。これが原点で、まず、地元の子どもたちを集めることが大事だ。一方、全国募集をしている国際観光科にもニーズがありやめることはできないが、ベースは地元から生徒を集めるという所に力点を置くべき。また、多様な生徒が集まってくるので、それぞれに見合った進路を保証することが大事。大学だけではなく就職や専門学校など生徒の希望にしっかりと応えることで、あの学校はそれぞれの生徒を大切にしてくれる学校だと思われる、自ずと地元から生徒が集まってくるのではないかと考える。

<武田委員>

○子どもの多様化は顕著。美麻小中学校にとって白馬高校は大事な場所。白馬高校に行けば美麻の生徒を生かしてくれる。白馬高校は研究室ではなく職員室体制で子ども一人ひとりの成長を皆で見てくれている。地元の子どもたちが何を求めているのかを知るためにも、我々委員が中学校を参観してはどうか。小中高と密に連絡を取り合える体制が必要。美麻のコーディネーターは幅広い人脈を持っており、その方たちから総合活動の進め方を教示いただいている。美麻小中学校に来て見てもらいたい。

<草本委員>

○スキーの全国大会で優勝した白馬中学生が、白馬高校を選ばなかったのは何故か、調べてみる必要がある。環境問題で活躍した卒業生を見て感じたことは、多様な出身地を持つ生徒が混ざりあうことが大切だということだ。だから全国募集も大事。高校生が小中学校へアンバサダーとして訪問し、どのような学校なら行きたいと思うか、意見交換会ができればよい。

<武田委員>

○白馬高校のスキー部をなぜ選ばないのか、その不安要素が何かをまず聞き出して取り除いたらよい。飯山高校ができるとき、白馬高校と取り合わないでそれぞれ別の種目を強化するといった棲み分けの話があった。スキーに特化した寮にして、優れた先生を呼び指導をすれば、強くなりたい選手が集まってくる。小林陵侑さんがインタビューで「後につづく若者がいない。」と言っていた。このままでは白馬高校のスキー競技選手がいなくなる心配がある。

<笹川委員>

○昔はスキーといえば白馬高校で、種目は3種類だったが、今はスキーと言っても多様化し、フリースタイルやスノーボードや基礎スキーがある。それに対して学校が対応しきれなかったと

いう過去がある。そこを検証すべきだと思う。スキーをやりたくて県外から来た生徒が、入学後の説明で、想像していたものと違い、厳しい体育会系のスキーしか選択できないと感じ、登山部に入った生徒がいる。保護者は、事前に細かい説明が欲しかったとおっしゃっている。こうしたひとつひとつの意見を取り上げて対応していくことが必要。学校の評価にもかかわる。

<松澤局長>

○昨日実施した地域みらい留学のオンライン説明会で同様の質問があった。「スキーができますか」「寮からスキー場までどうやっていけますか」というもの。この点を踏まえて今後議会に出して進めたいと考えているのは、公営塾の基本コースの中に地域クラスをつくり、地元の方がコーチとなって、スキーやマウンテンバイク、登山、SDGsなどの指導をするというしくみづくりだ。

<武田委員>

○同様の試みとして美麻には放課後子ども塾がある。アウトドアで英語を使って活動するなど、スクールパートナーが手伝ってくれる。白馬・小谷は村内に協力者が多いため賛同してもらえるのではないか。若い人と一緒に活動することで元気をもらい、村の活性化につながり相乗効果がある。公営塾でも募集をかけても良いと思う。

<松澤局長>

○7月頃から、公営塾サポーターの形で、何が教えられるか登録してもらい募集したい。

<武田委員>

○すぐにやれるのではないかな。地道だが、一人ひとりの子どもを大事にということが原点。

<草本委員>

○コロナ禍でできていないが、令和元年までイングリッシュデイというプログラムがあり、子どもたちが生きた英語を使うことができていた。白馬にはヒバ(Hakuba International Business Association)という外国人の商工会のようなものがあるので、そこに依頼すれば、白馬高校に定期的に来てもらえるのではないかな。インターナショナルスクールにも全国から7名の先生が着任するので喜んで協力してくれると思う。コロナ前には白馬高校とブリティッシュ・スクール・イン東京とのいい交流ができていた。復活したら今度は発信もして行きたい。

グループごとのまとめ

<白戸会長>

○時間となったので全体会に戻したい。

○2つのグループの討議の内容報告をおこないたい。

A 全員に発言していただいたが、高校を残すということが前提ではなく、どうしたら残るような魅力ある学校になるか。大人がどうするかではなく子どもたちが何を求めているのかという議論や、地域そのものの在り方や、地域にとって高校がどういう役割をしているのかということをはっきりさせたいという話が出た。また、協議会としては「こうあればいい」でとどまらず、誰が何をやるかを明確にしたうえで提案することが必要だという話が出た。

<武田副会長>

B 白馬ならではの特色を大切にしたい。県外生が何を目的として来たのか知りたい。また、地元の中学生がどのような高校を望んでいるのか現状を知ることが大事で、そのニーズにどう対応していくのか。現行の公立か中山間地か組合立か、どの方法が一番持続できるかを検討する。スキー部を特化していく一方、スキーはしたいがそこまで本格的にしたいくない子どもたちもいる。専門性をもつ地域の方たちのボランティアを募集して指導してもらうことが可能であれば、地域の人のもまた元気になる。白馬高生が地元の小中学校へ出向いて交流する教育活動を工夫していく。国際観光科も大事に育てていきたいという話だった。

<白戸会長>

○グループ討議が有意義であったので、次回は時間を長く確保したい。

○地元の子どもたちをどうやって育てるかを、本協議会だけではなくて地域を巻き込んで明確なビジョンを出していくことが必要だ。現実的にこの2年間に何ができるかということも明確にしていきたい。

○最後に、1点お諮りする。これまでの協議会は、学校の特色となる教育活動やカリキュラム、寮運営をはじめとする事務組合を通じた高校支援のあり方といった、どちらかというと具体的

な面についての議論が中心に行われてきた。国際観光科開設をバネとして、一時は生徒数を回復させた白馬高校も、ここ数年は再び生徒数が減少している。このたび公表された「高校再編・整備計画【三次】(案)」が確定すると、凍結されていた再編基準が適用されることになり、ふたたび再編基準に該当する危機が迫っている。現在白馬高校が置かれている状況を考えた時、私たちに必要なことは、単に生徒数を増やして高校の存続を図るといった方策を模索することだけでなくとどまらず、これからの白馬・小谷地域の将来を見通して、地域づくりあるいは地域の人づくりを再構想する中で、白馬高校の役割や存在意義をあらためて考えることだと思う。協議会として、広く地域住民の意見を集め、地域の合意形成に向けた取り組みが必要となる。

○昨年度の協議会では、現在委員である小谷中学校の校長先生に加えて、白馬中学校の校長先生にもぜひ委員として参加いただきたいとの意見が出されていた。地域の中学生や保護者のニーズを把握し、中学校と高校が連携して魅力ある高校づくりを進め、白馬高校への進学を希望してくれる中学生を増やすためにも両中学校の校長先生にぜひ参画をお願いしたい。

○そのためには規則の改正が必要とのことなので、今回、協議会として県教育委員会に要望したい。規則改正により委員の増員が可能となれば、中学生とその保護者に限らず、地域全体としてのニーズの把握や地域の合意形成といった面で豊かな知見をお持ちの方にも新たに加わっていただくことで、より様々な立場の方から、一層多様な意見を聴取することができ、よりパワーアップした形で、白馬高校が真にこの地域の学校として存続していくための方策を一緒に考えることができるようになるのではないかと考える。

○規則の改正を県教育委員会に要望することについて、委員の皆さんいかがか。  
異議はなく承認。

<有坂主任指導主事>

○室長に代わって答弁するが、委員増員の要請をいただいたので真摯に対応したい。ただし、教育委員会定例会で最終的に決定されるということをご了承願いたい。

<白戸会長>

○新しく増員する委員が決まったところで次回の会議を開催する。それまでにそれぞれ考えを膨らませてきてほしい。

## (8) 閉会

<井出教頭>

○ご協力ありがとうございました。次回の協議会は、8月ころを予定したい。また、第3回を11月7日(月)、第4回を2月13日(月)に開催したい。

以上